

## 博士學位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	中村 晴香		
論文題目	イギリス小説におけるポストヒューマンの表象 —— 『フランケンシュタイン』 から 『わたしを離さないで』 まで		
論文審査担当者	主 査	鴨川 啓信	㊞
	審査委員	金澤 哲	㊞
	審査委員	松宮 園子	㊞
	審査委員	武田 美保子	㊞

中村晴香の学位論文の独創性は、従来の英文学研究において周縁に位置づけられていた作品を「ポストヒューマン」という概念から捉え直し、ノーベル賞作家の仲間入りを果たした Kazuo Ishiguro の作品へと繋がる、イギリス文学内の一つの流れを明らかにしたところにある。より具体的に言うと、いわゆる「怪物」を主題とする Mary Shelley の *Frankenstein* (1818) を始めとして、人間化された動物の登場する H.G. Wells の *The Island of Doctor Moreau* (1896) と、透明化された身体を持つ「化け物」を描く同作家の *The Invisible Man* (1897)、吸血鬼という人外の存在を扱う Bram Stoker の *Dracula* (1897)、そして人間の二面性が異なる身体として表れる Robert Louis Stevenson の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* (1886) という 19 世紀の小説を、人間の複製クローンを描くイシグロの *Never Let Me Go* (2005) と関連づけて論じている。そして、人間と人間以外のものとの区別に潜む恣意性を暴くポストヒューマンの考え方により、怪物や人外の存在はイデオロギーによって生み出されたものであり、人間優位の思想が特定の時代や文化、そして作家個人の背景に影響された不確かな根拠であることを解き明かす。いわば、現代的な問題意識から上記作品群の新たな側面に光を当てるものと言える。

論文は、序論と結論を除いて全 4 章で構成されている。第 1 章「怪物の誕生」では、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』を家族とジェンダーについての物語と捉え直す。物語内での怪物の誕生過程と家族関係に関する怪物の苦悩とを、作者自身の問題と重ね合わせることで、怪物の人間らしさ、あるいは作者を取り巻く環境の怪物的歪みを明らかにする。丁寧なテキスト・リーディングと、ジェンダーに関する先行研究への十分な理解が示されており、学位申請者の文学研究者としての確かな基礎力が示されている。

第 2 章「怪物の世紀末」は、チャールズ・ダーウィンの進化論とその考えに影響を受けた優生学といった 19 世紀末の思想的背景に注目して作品分析を行っている。第 1 節の「動物と人間のあいだ——身体と法から読む *The Island of Doctor Moreau*」では、H.G. ウェルズの『モロー博士の島』における人間と「動物人間」との間の不確かな境界に着目し、出版当時の英国社会に見られた支配層とその他を分ける各種区別の恣意性を描き出すものとしてこの作品を読み解く。第 2 節「*Dracula*

の図式化される二項対立が示すもの」では、人外の存在が、東欧からの大量のユダヤ人移民と「新しい女性 (new woman)」の社会進出という同時代的な社会問題を象徴していることを論じる。ここでも、本文記述の的確な引用や広範な思想背景の理解に申請者の研究能力の高さを見ることが出来る。その一方で、科学技術をもとに作られる（本論文中で取り上げる）他の「人間でないもの」と吸血鬼とを同列に扱うことについて、幾分説明不足であるとの指摘が審査担当者から出されている。また、ユダヤ人表象については先行研究の膨大な蓄積があり、より広い問題意識を得ることができるとの指摘もあった。どちらの指摘も、申請者の今後の発展的な研究への足がかりとなるであろう。

第3章「変身願望」では、人間の二面性を描き出す作品に焦点があてられる。後期ヴィクトリア朝に見られる社会的二面性が、個人の内面および外面的身体へ表れているという視点からの分析である。第1節「*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*における媒介としての身体」では、ジークル博士のダブルであるハイドの身体が持つ、人間の欲望を投影する器という記号的な役割を論じている。第2節「*The Invisible Man*における透明性」でも、欲求を満たすための透明な身体に付与される意味を論じる。後者において、中心人物を取り巻く共同体の人々との関係について、若干説明不足などところがあるという指摘もあったが、どちらの節でも興味深い観点から概ね説得力のある議論が展開されている。

第4章「ポストヒューマンの行方」では、時代が進み我々と同時代の作家カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』が取り上げられる。人間のクローンの物語からオリジナルと複製との等質化を論じている。前章までの作品と出版された時代が異なることに関して、論文中での議論では幾らか不明瞭なところも残っていたが、公開審査の場で補足的な説明が示された。

全体として、「人間ではないもの」の文学的表象から、標準的人間を（意識的／無意識的に）作り出そうとするイデオロギーを読み解くアプローチは、大胆で刺激的であると評価できる。一方で、論者の視座が問題意識の革新性を十分に反映できていないのではないかという意見も審査担当者の中から出された。また、大枠の議論と各論との融合の面で改良の余地があることも指摘された。しかしながら、新しい概念をもとにして作品を再読するその論旨には説得力があり、なにより従来の文学研究の枠組みに挑戦する新鮮さと力強さは、申請者のこれからの研究発展を期待させるものである。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。

